

## 第5章 京都大学本部構内 AX22 区の立合調査

富井 眞

### 1 調査の概要

調査地点は、文学部博物館の南に位置し、西を東大路通がはしる。1998年度から総合博物館新営に伴う立合調査が継続的に行われていたが、1999年4月13日～同23日の立合調査をもって終了した。一連の工事に伴う調査であったので、ここに1998年度の成果も併せて報告することにする(図66-265・272)。

周辺の調査では良好な遺物包含層は展開していない。弥生時代前期末の旧地表面の存在とそれを覆った弥生前期末～中期初頭の土石流に伴う厚い砂礫堆積層(「黄色砂」)、およびそれが流路の側刻で開析された高野川系流路のいわゆる「攻撃面」が確認されるにとどまっていた。

今回の調査でも、数点の中近世の陶磁器片の他には遺物はまったく回収されなかった。また、土質からみて埋没時期が中世以降に帰属すると思われるものの、遺物をほとんどまったく包含しない溝が2条検出できたにすぎなかった。したがって、発掘調査ではなく立合調査のかたちをとった。調査では遺物を極少量しか回収できなかったために、人間活動の直接的な痕跡については不明瞭な部分が多い。けれども、中世以降に埋没したと思われる2条の大溝はそれぞれ、平安時代後期以来の白河街区の「今朱雀」と「一条大路末」に関連する可能性も捨てきれない。このほか、弥生中期以後の高野川系流路の攻撃面と、弥生前期末の土石流による巨石の堆積が確認された。人間生活に対するそれらの影響は見いだせないものの、北白川遺跡群の立地や土地利用を解明する上で重要な自然地理学的知見が導き出すことができた。

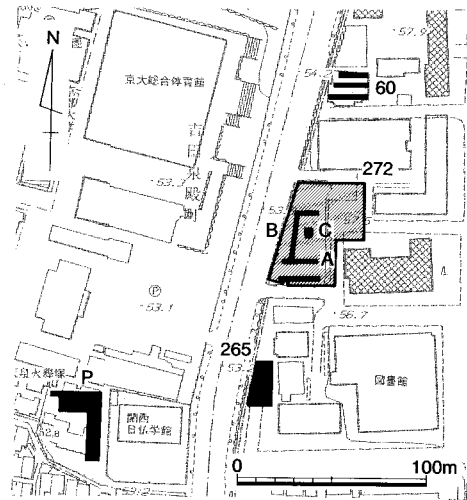


図66 調査区の位置 縮尺1/4000

2 調査の成果 (図版27, 図67)

**時期不明の大溝** 272地点のAトレンチ東辺に、南北方向にはしる幅3.2m、深さ1.8m、底面幅1.0mの大溝 SD1 を確認した。包含する遺物は赤褐色を呈する1cm未満の土師器数点にとどまり、時期を特定できない。埋土は一樣ではないが、主たる構成土層は本学構内に広くみられる近世の遺物包含層である灰褐色土より幾分茶色がかった褐色砂質土なので、埋没時期は中世ないし近世で、幕末にまでは下らない。SD1 は、その延長線上のCトレンチ南断面には確認されず、両トレンチの間で途切れる。

Cトレンチの東西両断面で、東西方向にはしる幅1.7m、深さ0.6m、底面幅0.5mの大溝 SD2 を確認した。Aトレンチからおよそ16m北に位置する。遺物はまったく出土しなかったけれども、SD1 の主たる埋土と同様の褐色砂質土を埋土とすることから、埋没年代はSD1 と相前後する頃と考えることも可能である。なお、SD2 はBトレンチでは確認されていない。

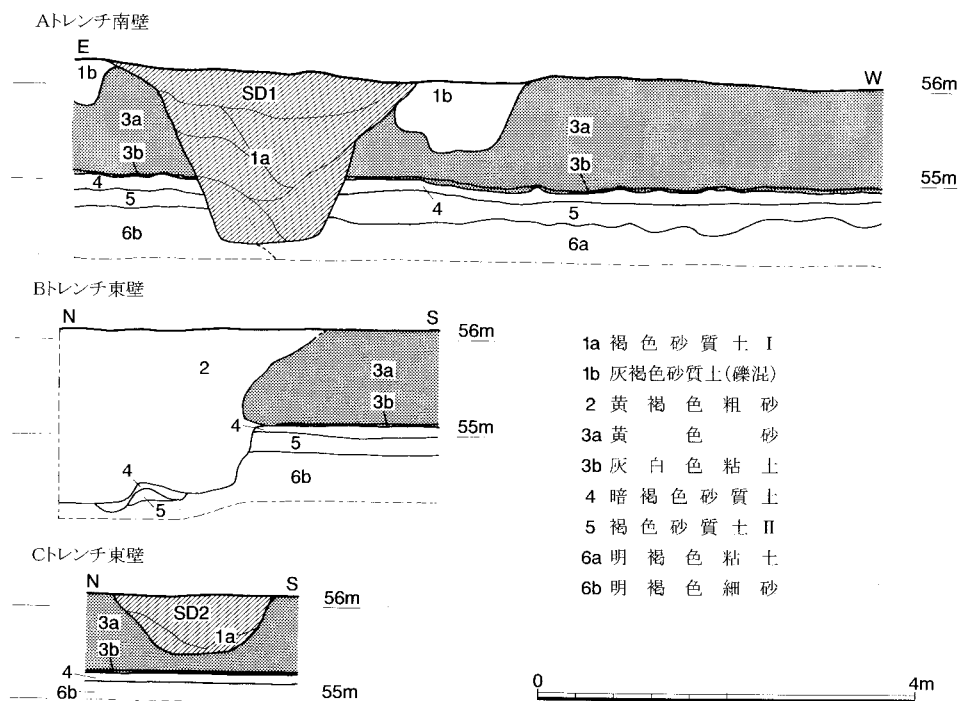


図67 調査区の層位 縮尺1/80

## 調査の成果

かつて試みられた白河街区の復元では、本調査区は、南北方向の今朱雀が条坊北端の一条大路末に行き当たる地点に相当する〔浜崎1991〕。今朱雀や一条大路末については、本調査区を含めてこれまでに該当する時期の路面などの遺構は確認されていないが、111地点で検出された中世に埋没した南北方向の大溝の存在は〔五十川・飛野1984〕、その復元の根拠の一端を担っている。今回確認された大溝 SD1 は、この今朱雀の想定線におよそ位置するが、出土遺物による時期比定がかなわないので、ここではそれに関連する溝になる可能性を指摘するにとどめる。本部構内西南隅に発掘調査が予定されているので、そこでの課題としておきたい。SD1 に直行する大溝 SD2 も、時期比定ができないことに加え、BトレンチとCトレンチの間で途切れていること、同じく一条大路末の想定線の上に位置する271地点でも該当するような示唆的な遺構がみられないこともあって（本年報第4章）、ここでは一条大路末に関連する施設として積極的に評価することは控えたい。

**高野川系流路の攻撃面** 272地点Bトレンチの断面に、黄色砂（第3層）からその下位の黄褐色粘土（第6層）までを削る黄褐色粗砂（第2層）を確認した。黄色砂には葉理がほとんどまったく確認できないのに対し、黄褐色粗砂には明瞭な葉理が認められたので、この粗砂層は水成堆積である。この攻撃によって削られた第4・5層のブロックも散在する。堆積年代については、京都大学構内で弥生時代前期末の鍵層とされる黄色砂を削っているのだから以後と言えるが、上部が攪乱を受けているために下限は不明である。

同様の状況は80m北方の60地点でも見られる〔樋口・亀井1979〕。そこでは黄褐色砂の下位に、高野川系流路の特徴を示す、チャートの目立つ礫層が堆積しており〔清水1991〕、その上位の黄褐色砂もそれに伴うものと理解されている（図68）。272地点ではそうした礫層は確認できなかったものの、堆積層順の類似性や距離と標高の整合性から、同

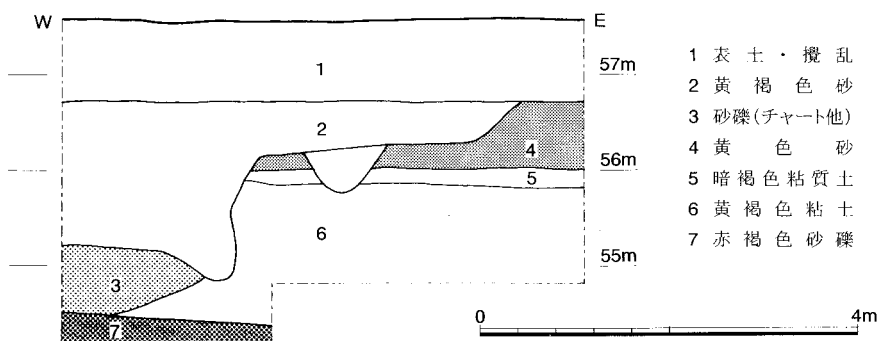


図68 60地点の層位 縮尺1/80

時期の高野川系流路の攻撃面と考えるのが妥当であろう。

60地点では、チャートの目立つ礫層と黄褐色砂層を東西方向の断面で確認していた。そこから1度ほどの下り傾斜で南下した272地点では、礫層は見られず、また黄褐色粗砂層の攻撃を南北方向の断面で確認した。さらに、265地点ではこうした河川の流下痕跡は認められない。以上より、流向はおよそ北北東から南南西だったと思われる。上流については、3 km北方の山端の辺りから、直線的に南南西に向けてきたか、あるいはどこかで流向をいったん南東へ変えてから再び南西へと転じた、という可能性が考えられる。吉田キャンパス周辺の既往の調査成果だけでは結論を下せないが、高野川の東を流れる音羽川や一乗寺川との関係とともに、北西から流れ来て高野川に合流する賀茂川との関係についても考慮する必要がある。

272地点は、現在の高野川岸からおよそ700m東に位置している。この272地点の西南西150mに位置するP地点では、10世紀の氾濫原、12世紀の遺構を覆う鎌倉時代の整地層、室町時代後期～江戸時代前期の洪水性の砂礫層、江戸中期～後期の洪水性の砂礫層、がそれぞれ確認されている〔内田1998〕。272地点に痕跡の残る氾濫がこれらの出来事に対応するかわからないが、P地点の最も新しい洪水層でも、上面の標高が52.0m程である。それに対して、272地点の黄褐色粗砂層上面は56.1mで、60地点の黄褐色砂上面では56.7mである。川岸からの距離、P地点と60・272地点との標高差、こうした点からみても272地点をおそった高野川の氾濫規模の大きさがうかがえる。

### 3 黄色砂の堆積と旧地形

272地点の黄色砂は、層厚は1.0mをはかるが、粒径は5mmを超えない均質で粗い砂である。しかし265地点では、黄色砂は1.7m以上の層厚があり、さらに径1mを越える巨石地点を包含していた。このように黄色砂の堆積は、後世の削平を考慮せざるを得ないにしても、一様ではない。そこで本部構内周辺における黄色砂の層厚と黄色砂内の巨石の分布を示したのが図69である。

今出川通以北に位置する北部構内では黄色砂の堆積が2.0mを超える地点があるが、以南の本部構内では、北辺・西辺でそれに匹敵する厚さが確認されている以外は、1.5mを越えるようなことはない。およその傾向を指摘するならば、本部構内北辺・西辺では1.0m以上を保っているものの、それ以外では1.0m以下になるようである。層厚や巨石分布が一様でないことの原因は幾通りか考えられるが、堆積の厚いところは、上部にあまり

黄色砂の堆積と旧地形

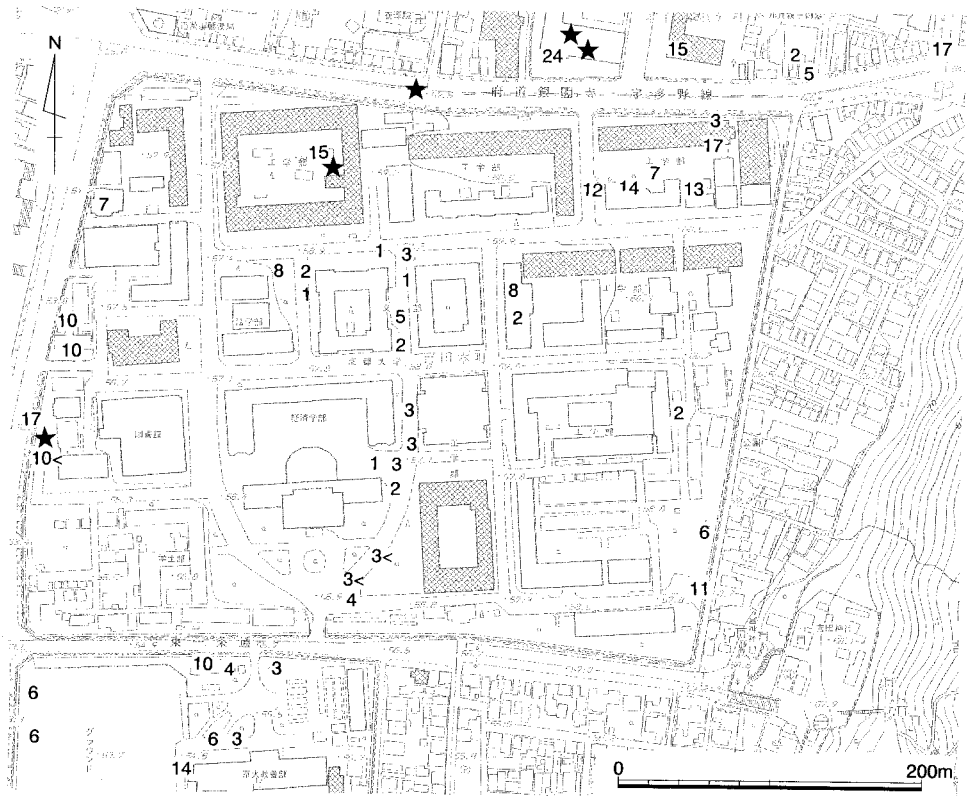


図69 黄色砂の層厚と巨石の分布（層厚は×10cm，巨石は★） 縮尺1/5000

削平が及ばなかったか、下部の地形が窪んでいたか、と考えるのが妥当であろう。また、図69では巨石分布と層厚が相関するが、砂質の土石流においては地表を流れる砂が浮動する巨石を支持できなくなる地点に巨石が堆積することと、全体的な地形の傾斜とを考慮すれば、巨石分布地点は谷ないし河道のへりであった可能性も高い。これらの検証には黄色砂直下の地勢が鍵となるが、実際には、本部構内の東部や南部では、黄色砂が確認できなかったり、黄色砂の直下に土壤化層などを確認できずに白色ないし黄色がかった砂層が直に下続するためにその境界の識別に困難を伴ったりする。あるいは、南接する総合人間学部構内東北辺の238地点では、黄褐色を呈する砂層の上位に弥生前期の土壤化層の形成があり〔伊藤2000〕、この砂層を黄色砂と見誤る危険性は高い。したがって、本部構内の東南辺では弥生前期末の旧地表面を検出することは不可能に近く、その意味では当時の地形を復元できない。しかし、この辺りの砂層上面の標高は周辺よりも低くはないので涸れ谷

京都大学本部構内 AX22 区の立合調査

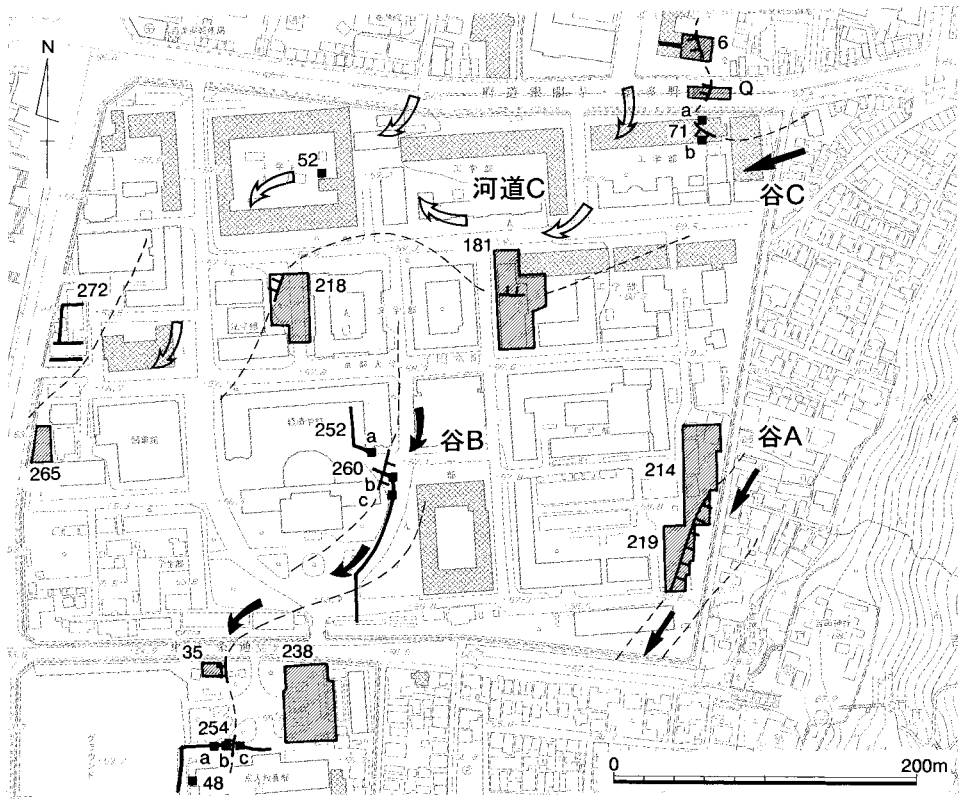


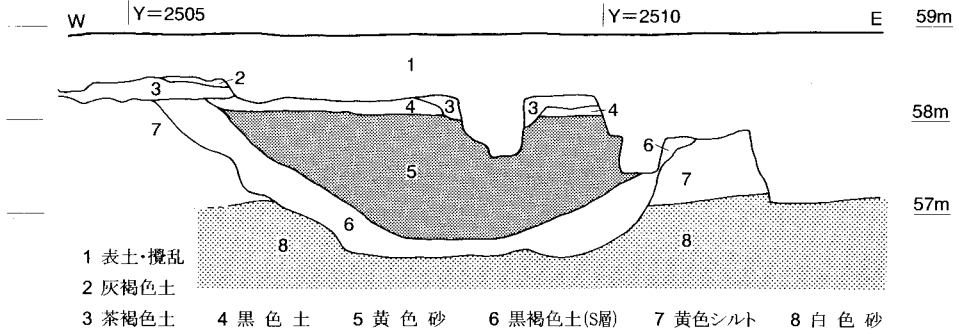
図70 弥生時代前期末の地勢 縮尺1/5000

とは思えず、また黄色砂の分布しない地点があることから、むしろ一帯が流路間の大きな微高地だったと考えられる。こうした諸前提のもと、既往の調査で得た黄色砂の層厚やその直下の標高に照らし、本部構内における弥生前期末の地勢復元を試みたのが、図70である。

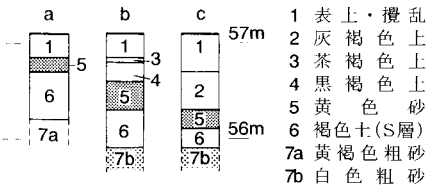
軸線が吉田山の山裾におよそ平行する谷Aは、214・219地点の発掘調査でその存在が知られた〔千葉・伊藤ほか1997〕。黄色砂直下に堆積している土壌化層（以下、「S層」）が途切れずに分布しているので（図71-1）、恒常的な水流はもちろん、季節的な奔流さえもなかったと考えられる。この谷の形成について考えてみると、S層直下には、西側の土手でも東側の土手でも黄色シルトが厚く広く堆積していることから、吉田山の西裾が抉られた直接的結果とは考えられない。より古い西側の白川系流路由来の砂層堆積と吉田山との間に放棄された流路が、滞流して形成されたものであろう。形成年代は、黄色シルト層や

黄色砂の堆積と旧地形

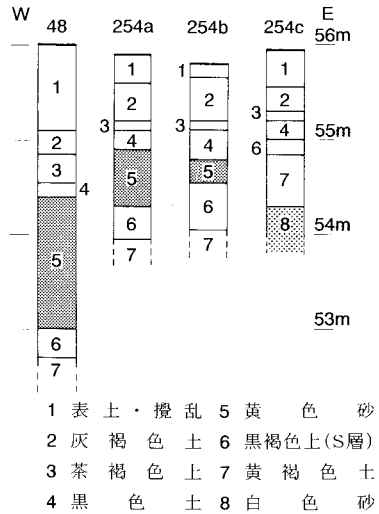
1 214・219地点



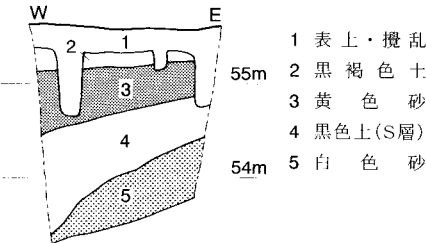
2 252・260地点



4 48・254地点



3 35地点



5 238地点

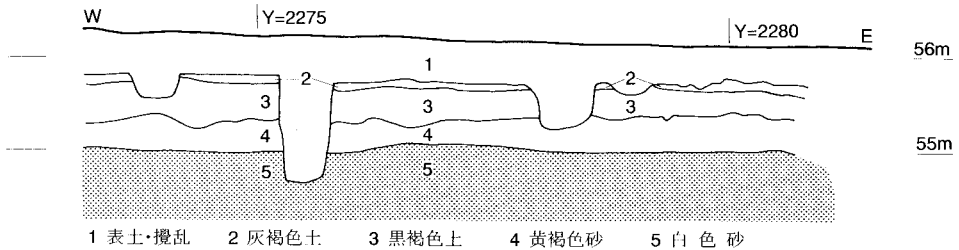


図71 関連地点の層位(1) 縮尺1/80

それ以下の地層に遺物が確認されていないので、不明である。

谷Bは、252・260地点の立合調査と（図71-2）、271地点での発掘調査で（本報告第4章）、S層が東に下がるのが部分的に認められている。谷Aと同様、S層が途切れて礫層や砂層が下続するような状況は確認できていないので、干上がった窪地だった可能性もある。総合人間学部構内北辺の35・48・254地点で確認されている〔吉野1977、宇野・岡田1979、伊藤2002〕、S層が西へ急に下る斜面をこの谷Bの東側の土手とみなせるかも知れない（図71-3・4）。S層の下位には、土手の上方ではシルト層や土壌化の進んでいない粘質土層が粗砂の上位に堆積している。土手の下方では粗砂層が堆積している。上述のように238地点ではその粗砂が形成した高まりの上で弥生前期の遺構が検出されているが、この粗砂層やそれ以下は無遺物で（図71-5）、したがって、谷Bの形成年代も不明である。

本部構内東北隅の71地点で〔泉・浜崎1981〕、S層の南への急激な傾斜が確認されており（図72-6）、これを谷Cとする。また、181地点では〔五十川ほか1992〕、S層が北へ向かって薄化・下降しながら下位の白色砂層に挟まれるのが確認されており（図72-7）、すなわち、河原か涸れ谷の南側の土手だった可能性が高い。そして、黄色砂下半に巨石が堆積している52地点でも〔宇野・岡田1979〕、S層は確認されないままに白色砂層にいたっており（図72-8）、ここが谷床であったと考えられる。このように、黄色砂直下の土層のあり方からみて、本部構内北辺を今出川通にはほぼ並行するかたちで、散発的ないし恒常的に水が流れていたと考えられる。さて、71地点の西には、北部構内から分岐・南下する白川系流路があり〔泉1978〕、谷Cはそれと合流すると考えるのが妥当である。したがって、合流後をここでは河道Cと呼ぶ。河床と想定される52地点の南に位置する218地点の北壁では〔千葉・吉井ほか1997〕、西へ向けて黄色砂の堆積が急激に厚みを増すことが確認されているので（図72-9）、河道Cはこの辺りで白川扇状地地形の規制から放たれて高野川の流域に入ったか、あるいは南方へ走向を転回したことになる。その西に位置する272地点は、上述のようにS層の堆積は南北方向には傾斜が1度ほど、東西方向にはほぼ水平であることから、白川扇状地から完全に西にはずれていると思われるが、すぐ南の265地点では黄色砂層の下位の地層を確認していないものの上述のように数点の巨石が黄色砂内で確認されているので、河道Cが272地点の東方を経て265地点にいたる筋を維持していた可能性もある。河道Cの形成年代は、218地点ではS層から縄文時代後期中葉の土器片がまとまって出土しているので、それ前後と考えられる。また、北部構内から南下する白川系流路の延長線上に谷Bが位置することから、それと直交する谷C・河道Cは、谷



黄色砂の堆積と旧地形

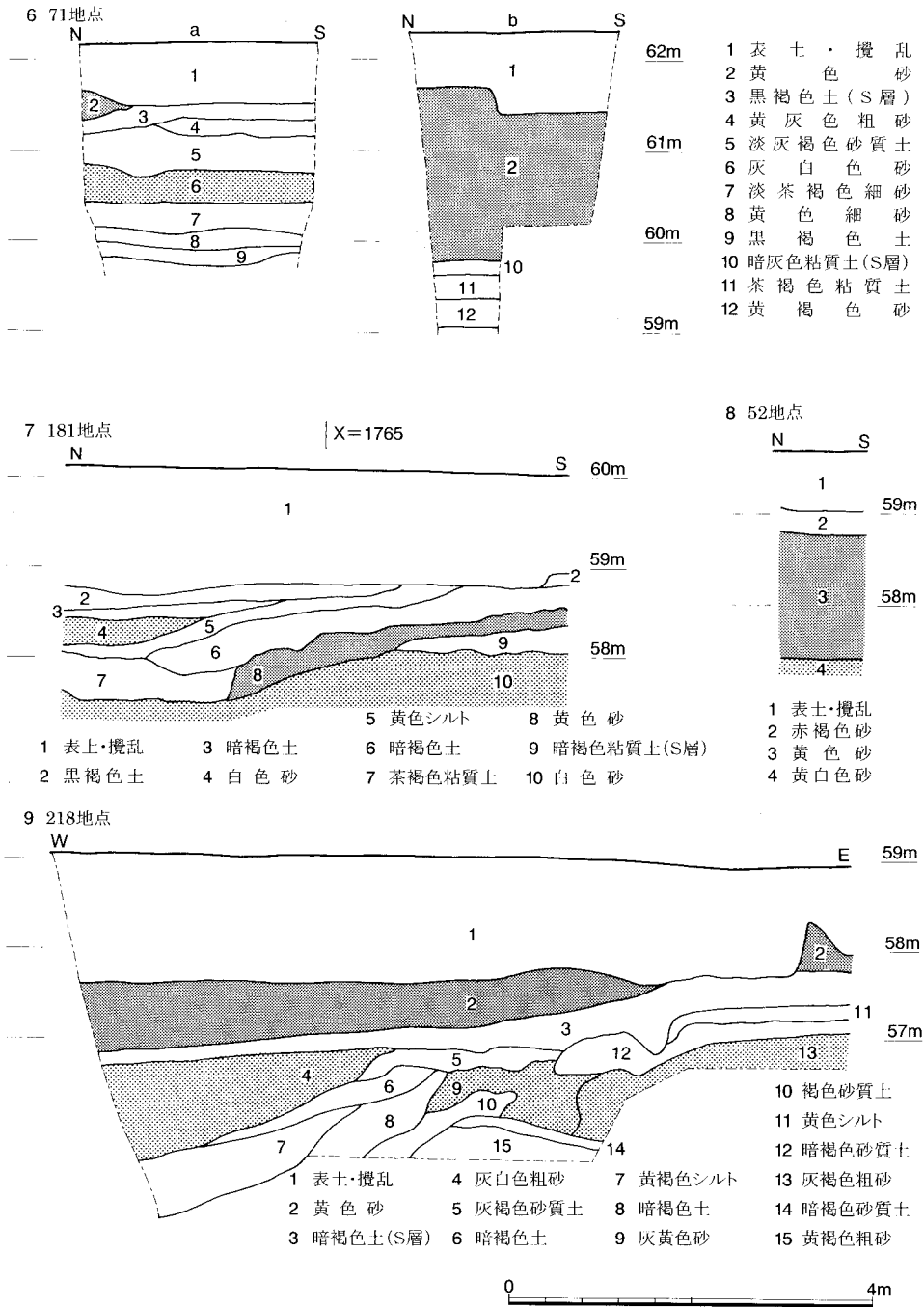


図72 関連地点の層位(2) 縮尺1/80

Bよりは新しいかもしれない。なお、総合人間学部構内西辺中央で検出された南南西に流向をもつ流路群との関係は（図版1-111・220地点）、今後の調査によって明らかとなろう。

巨視的にみれば白川扇状地の扇端付近に位置する谷A・B・Cは、微視的にみれば、吉田山西北の山裾を扇頂として南南西から西へと展開する小さな扇状地地形を〔石田・竹村1985〕、それぞれが開析谷として構成要素となっている小谷群、ないしはその網状流路痕跡と考えることができる。これを弥生時代前期の遺物の出土の傾向に照らせば、当時は、白川系流路の直接的な影響を被らない地点が利用されていた状況が浮かび上がってこよう。すなわち、214・219地点では、谷Aに対してその東側から遺物が投棄されたことが遺物出土状態の分析から推察されている〔千葉・伊藤ほか1997〕。つまり、吉田山を背後にして白川系流路からの直接的な攻撃を回避したところに活動の拠点があったことがうかがえる。また、谷Aと谷Bの間の大きな微高地上に遺構を構築している238地点も、網状流路の屈曲内側の河畔すなわちいわゆる突州状の地形部から上がったところに位置しているとみなすことができ、谷Bに水流が予測されてもその直接的な浸食の可能性の低い地点を利用していたと言える。71地点や、それに北接する今出川通のQ地点やその北の北部構内の6地点は〔長戸ほか1997、伊藤1999〕、谷の合流部ではあるけれども谷の肩の傾斜は急であり、谷底までの標高差も十分に確保されている。こうしてみれば、弥生前期の遺跡立地は、白川系流路の可動域を予測した結果の現れとみなすこともでき、つまりは白川系流路に大きく規制されていたとも解釈できるのである。

この予測を超える大きな土石流に襲われた後は、網状流路痕跡の凹凸も解消されて緩斜面が続く穏やかな地形になった。また白川系流路も、白川扇状地の扇頂から東山の山裾に沿って南ないし北に流れる河道を主な流路とし、この一帯は、扇状地形成が停滞して安定的な土地になったものと思われる。けれども、粗砂の厚い堆積によって、水田耕作は無論、おそらくは狩猟対象動物の生息や可食堅果類の生育にも不向きな環境が生み出され、白川扇状地上での弥生中期の活動は極めて限られたものになる。

第3節において、増田富士雄氏より有益なご教示を賜りました。末尾ながら記して、感謝いたします。

#### 〔注〕

図68・図71・図72の層位図は、引用文献中の図を本文の主題に合わせて部分的に簡略化や反転等の作業をおこない再トレースしたものである。